

のに出会ったんびに、そういう市芦がどんな状況であつてもあり続けることで、そこで、もしかしたら「ほっとかれへんから一緒に居たらかな。ほっとかれへんから一緒に生きよかな。自分のことはちよつと置いてでも、ちよつと頑張つてみようかな」そんなものがずっと流れ続けていくような気がするんです。

うちの息子、二番目も三番目も市芦に行きましたけど、確かにもう追つかけてくれる先生も居ません。問題が起こつてもすぐ退学。確かに今の市芦にも、大変寂しいというか、殺伐としたものが在ります。だけどやつぱり脈々と流れているものがある。大きな力に押し流されようとするとき、震災もそうかも知れないし、震災がきっかけであつて、そこで起こった様々な押し流されそうな、もう生きて行くのがしんどなる、「もうこれ以上やっていかれへん」という所に来たとき初めて流れてくる、そういう情けみないなものをずっと絶やさずに流し続けて来たのが市芦だったのではないかという気持ちがあります。

だから私が永いこと市芦に係わつてきて、息子も来年卒業する予定なんですけど、先ほどの、卒業生の方も何度もおつしやつていたように、この人間の中に流れている熱いもの、情けみないなもの、他人をほっとけないという、こんな思い

というのは絶対、市芦には流れていると思うんです。流れているから人が寄つて来るんです。

一人で生きて行けない、一人で生きて行くのがしんどい、生きることが辛い、そんな人たちが集まらないと、生きるというものがどんなことか分からないんじゃないかと思うんです。

市芦はそういう人たちが集まる所だと思つています。そんな熱い思いに水を差されている訳ですから、今ここで、また熱い思いを寄せて、そしてまた、ここに私が加わつて喋らせてもらったことも縁だと思ひます。私は、市芦が私の人生の一つだというふうに思っています。これからどうなるか分からないにしても、ここに集まつている人たち、ここに来れなかった人たち、障害を持った子の親たちが繋がつて、群がって、寄つていける唯一の市芦を心から守つて行きたいと思っています。

私たちは市芦を必要としている

秋田 理津子(中学生保護者)

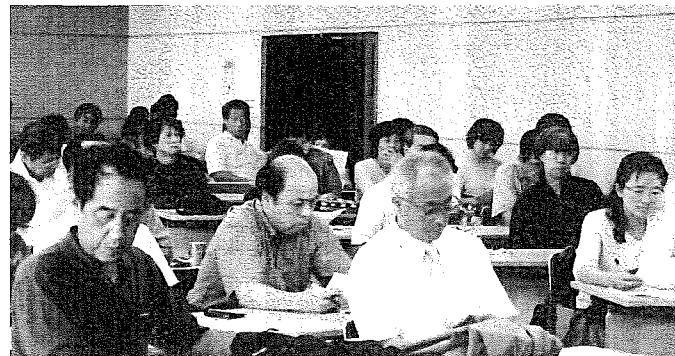
朝日ヶ丘町に住んでおります秋田と申します。現在、小学校五年生と中学校二年生の娘が居ります。生まれも育ちも芦

た。この先生たちが色々な意見を言ってくれたり、私の力になって下さったことはすごく大きかったと思います。この先生たちが市芦にいらつしやると言うことで、子ども達がどれだけ助かつているかと言うことがすごく分かったような気がします。ですから、この市芦を将来の子ども達のためにも、是非残しておいて欲しいと思います。うちの娘の夢を叶えるためにも、私は市芦が必要です。

市芦ロードを歩くのも将来への道

古武家 育子(中学校教員)

こんにちは、潮見中学校に勤めております古武家と申します。私は教師になつて二〇何年になるのですが、本当に芦屋で育てられたという実感を持つております。それというのも私が芦屋に勤めた二〇何年前、差別に立ち向かう、先程も話



がありましたが、子どもや親たちからいっぱい問題提起を受けて、そこで本当に人間として、教師としてどう生きていったらいいかなという問いかけを受けて、涙も流して、喧嘩もして、やつぱり言い続けて、訴え続けている子ども達、親たちにどうして寄り添って生きていったらいいか、ということをやつと考えさせられたような気がします。

それで、当時は、一五年以上前のことですが、市芦に行かせる子ども達の事を

屋で、中学校、高校と芦屋の学校を卒業させていただきました。娘は二年後、受験を控えております。私の事情から娘を今すぐ苦勞させております。家の事情から私学にはとうてい行かせる事が無理な家庭で、家から近い、一五分ほどで行ける市芦に行けば、交通費も要りません。就学奨励金が出ますので、教育に関しては全く心配する事がないんです。

娘は現在、吹奏楽部に入つてまして、将来の夢として、兵庫警察音楽隊に入りたいとの希望をすごく持っています。また、高校に入れば、芦屋市の吹奏楽団に入りたと言ふことも考えています。私には行かれない娘にとっては、市芦しか学校がないのです。そういう切実な思いを込めて、私は娘の夢を是非叶えてやりたいと思うようになりました。

市芦高校が廃校になれば、今度私たち以外の子ども達が「芦屋の学校に行きたい。もう一回市芦を建てて欲しい」と思つても、もう二度と学校は出来ません。私はそう言う思いを込めて、この市芦の署名活動や集会には参加して来ました。

娘の夢を叶えるために、是非、私の出来ることがあれば、精一杯させていただきます。また、皆様にも是非ご協力をお願いしたいと思います。

そして、私は今、愛護協会員として鈴木先生や小川先生を知る事が出来まし

含めて、中学と高校が中高連絡会を開いていた時代、市芦の先生から子どもと共に歩むということはどういうことなんだという問題提起を含めて、いっぱいいい出合いをもらいました。

一番最初の私の出合いは部落出身の生徒です。その子が訥々と語つたり、その親御さんが訥々と語られる中で、差別の現実の中で本当に教育を奪われて来た状態にハッとさせられました。そして、教師のスタートのときは障害を持つている生徒たちと共に歩む機会を与えられて、そこがすごく考える原点となりました。

そういう芦屋の教育の原点みたいなものを感じながら、この二〇何年間、やはり時代の流れがあつて、非常にその取り組みがしにくい中で、ひとつは、その卒業生達が中学校時代に自分の思いを語つて、自分はこうして市芦に行くんだ、という進路の語り合いをしながら行かせた取り組みというのは、時代が変われども、私は二〇何年、原点は変わらないなあと思ひます。

しかしながらやはり、市芦を受験する子が本当に小さくなつて受験していかざるを得ないような、そんな現実が一方ではあります。そうではないんだということ、かつて卒業生を送り出した一教師として、卒業生の歩みを熱く語りながら、「市芦の先生待つているよ。一生懸

命話聞いてくれる先生待っているよ」ということを言いながら送り出しています。

かつての卒業生の中で、市芦に行つて、かなり先生に迷惑をかけた生徒も持ったことがあります。「停学二週間くらつてしまった、どないしよう、やめよか」と言うた生徒もいてたんですが、私が「絶対やめるな！何があつてもやめるな！」と言い続けたら、その当時の先生も辛抱がいったと思うんですが、受け止めて下さつて、何とか卒業して、就職することも出来ました。本当に辛抱のいたことだと思ふんです。生徒の表面には出ない、心の底流にある思いを受け止めて下さりながら、指導して下さっている市芦の先生というのは、私にとつたら前提なんですね。そういう現実のある中で、私はやっぱり絶対市芦なくしたらあかんという思いの中で、市芦の実践を熱く語りながら、子ども達の指導をしている最中です。

現在中学二年生を担当しているんですけども、経済的に厳しい家庭が随分増えてます。不況の中で。それから、家庭状況が非常に不安定になつて両親が別居せざるを得ない、とかいうふうな状況の中で、非常に厳しい中で生活している子どもの数が随分多いです。

そんな中である女の子が、今、中学2

出来にくくなつていいる社会情勢の中で、絶対これは許したらあかん。ここを許したら、もつとどつとどつと、どえらいことが来るんじゃないか、と思つてしまふぐらいの闘いだと思ひます。そういう意味で、私も教師生活があつたよつとしかなくなつちやつたんですけども、あと一〇年の中で、最後の最後まで子どもに寄り添う教師であり続けたいし、そういう生き方をしたいし、そういうことを提起し続けてくれている市芦の存在は私が芦屋で教師をし続ける限り、無くなつたらあかんと思ひます。共に頑張りましょう。

市芦を必要としている

階層の人たちがいる

吉村 士郎 (市芦教員)

市芦で新採用となつた英語の先生がいました。三年目の昨年、初めて学級担任(二年生)になりました。引き続き二年生・三年生と担任をし、卒業まで生徒を見て送り出すのが教師としての一つの道筋だと思ふのですが、今年その先生は他校に転任されました。その穴埋めとして私は二年生の学級担任をしています。

今、担任として、生徒たちといろい

年生なんですが、「私の行くところないねんな」とつぶやいたりしてしまつています。「そうじゃないよ。そうならんように先生頑張っているんや。こういうこともあるよ」という話をしたりするんです。

二年後にはもう一つの芦屋南高校の普通科がなくなつてしまひますし、普通科が少なくなつてしまふ。そんな中で、市芦がなくなつていくという噂が随分子ども達の中に広まつて、不安を抱え、元気をなくしている子ども達もいます。そんな現状の中で、「そうじゃない」という動きを絶対創らないかんということを実感します。

つい先日、励みになる手紙を卒業生からもらいました。現在市芦に通つている子ですけれども、こんなファックスを寄越してくれました。五月下旬のファックスです。

「学校に行つたら、長瀬先生とか、吉村先生が市芦廃校反対の署名をとつてたよ。親とかも反対しているし、親戚とかも反対しているから頑張ろうね。」

「(市芦は)母校になるところだし、それに勉強が苦手な子、友達づきあいの下手な子、自分自身のことすらなかなか見つめられない子が、市芦に行つて全てを解決してくれる。そんな学校は他にはない。市芦に入れば、誰もが気付くつ

ろな話をしていきます。一学期の初めの頃のロングホームルームで、作文を書かせました。市芦がなかったら、君らはどうしていたのかが題でした。生徒たちが書き出す内容は「みごと」です。

多数の生徒は、中学でもっと勉強して県芦にいつていいると答えます。残りの生徒は、親に頑張つて働いてもらい、私学に行かしてもらつと答えます。なにが「みごと」と言えば、「市芦がなかったら、高校進学は道はなかった」という生徒たちの現実の、裏返しと表現です。市芦がなかったら困ると言つてゐるのです。

市芦に通う生徒の多くが、その兄弟姉妹も市芦生だということ。市芦に長くいると、「あの子の妹か」「あの子の弟か」ということを痛感します。今年の三年生は、三八回生です。市芦を卒業した生徒たちが結婚して、その子どもが市芦に入学している時期になつています。

多くの人が発言されたように、市芦をなくしたらいけないと思ひます。市芦を必要としているたくさんの子どもが、高校進学への道を失ひます。廃校阻止に向けて共に頑張りましょう。

て。そんな学校は周りから何と思われても動じずに、自分らしさが表に出てこそ人間だと思つて、市芦が教えてくれたよ」というファックスをくれました。「それで毎日、あの市芦ロード」、坂道のことやと思ふんですけれど、「あの市芦ロードを歩くのも将来の道やと思ふ」というそんなファックスをくれたんです。

彼女は厳しい現実がある中で開拓しつつ歩んでいる子なんですけれど、子ども達にとつて、本当に自分を見つめられたり、その子の居り場が市芦にあるということ、かつての話ではなくて、今そんなだということを、お互いもつともつと自覚しようじゃないか、ということ。私はこの手紙を見て思ひました。やはり送り出す側がそういう確信を持つて、子ども達に語らないとあかんのじゃないかなという実感を持っています。

私は「学校を創つて行くのん君達だよ、あんた達だよ」とつていうことを言っています。周りのせいにするなと思ふんです。こんな学校創りたいねん、友達と手を繋ぎながら助け合う学校創りたいねん、そんな熱い子を私はずっと市芦に送り続けたいし、そうあり続ける学校であると思ふし、先程も言われましたけど、この市芦廃校反対の闘いは絶対勝たなかったら、今の厳しいろんなことが



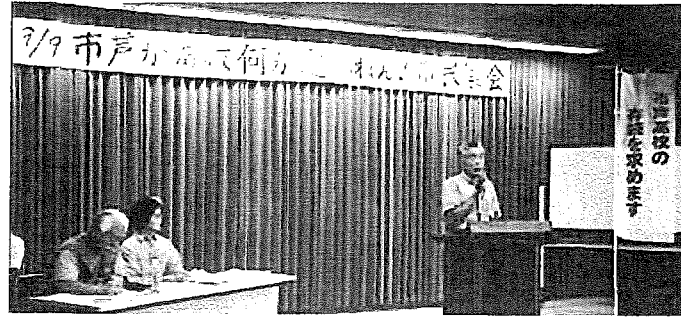
新入生一四人でも募集続ける私学

木島 行雄 (園田学園教員)

木島と申します。私学は授業料が高いので。でも、市芦がなくなつたら園田に来る生徒が増えて良いかなあと思ひながらも聞いていましたけど、そんなことないんですよ。自分の都合だけじゃなくて、この問題捉えなあかんねんなあと思ひているんですけど、色々世の中へんなことばかりで、良いこといっこもなくてどないなつてんねんなという感じがしています。

私も芦屋市民なんです。自分の家も山手幹線道路事業にかかつてまして、うちの周りは皆立ち退かれて、うちだけ残つてゐるんですけど、言うことはうちの買収のために市芦売らんかと思つて。聞くところによると、二号線のところにあ

当に怒らなあかんということ教えてくれた」とか、これらのことはよう考えてみたら、いままで私たちが定時制の子どもたちと集会をもったときに、やはり定時制の子どもたちが集会で言っていたこととおなじなんです。ああやっぱ市芦は昼間定時制つまり昼間の定時制高校やなと思いが、今も話を聞いてしまったわけ



ここ一年間で言うと、いま県教委が進める姫路から尼崎までの各高等学校を片

つ端から統廃合していく、その中でまず定時制に手をかけて阪神間の四校の定時制高校をまず潰した。神戸の定時制も潰すことに手がかけられている。そして姫路の方の定時制高校も三つを潰して一つにする。そして昼間の高校つぶしが市芦に始まっていく。こういうふうに見とるわけだ。

尼崎のことなんですけれども、県教委の統廃合の中で城内高校だけがその中で残った。しかし、城内高校の先生も城内高校の在校生も、城内高校の卒業生も、いつまでも城内高校が何もしないでいて存続し続けることはあり得ないと、こういう認識のもとに城内にかかってくる攻撃があれば断固として闘っていくという覚悟を、ここ四年間のけんかの中でもってました。

そして尼崎市は城内高校に対して、いままでも兵庫県下で授業料を取っていない学校は非常に少なく城内高校はその一つだったんですが、授業料を取る。そして定時制の子が学校に行きにくくするように給食の補助費もカット。そういったことを打ち出してきたときに、卒業生・在校生中心に尼崎市の市会議員一人ひとり回って、城内高校の生徒が何を勉強し、何を求めて、城内高校で何を教わったかというのを各市会議員に話しながら、またその旨を塚口でも阪神尼崎でもJR

る私立の各種学校に市芦の跡地を売るような話もちろっと聞いているんですが、土木の話とお金の話と教育の話がごちゃごちゃになってしまっていて、市芦の先生とも付き合いたいんですけど、泥臭い話が多いんです。

この問題は、教育はちよつと置いて学校つぶす、という話です。園田も少子化の話で実は大変なんです。中学なんか一四人しか居ない。募集しても集まらない。私立です。まして一四人で、学校あるんです。それでもまだ、来年も募集します。市芦なんか八〇人、数ある人が希望されている学校を今つぶそかと、とんでもない話です。要は市立高校というのは、私も市民の立場で言っていますけれども、これは市の考え方です。今市立高校がなくなってしまうたら、阪神間で市立高校を持つてないのは市芦市だけになります。

市芦の政治というか、市の考え方が貧困なんです。道路や南芦屋浜の公園、そんなところには金使うけれども、子どもの未来には金は出さん。そのうち福祉にも出さん。年寄りにはようけ居るけれども、役にたたへんから金ださへんとかというふうにだんだんなっていくんじゃないかと思えます。それはものすごく人間として大きなものが欠けてると思います。そう言うことが今問題じゃないかと

在校生・卒業生の力で学校を守る

山崎 貢（定時制高校教員）

夜間定時制の尼崎南高校の、そして兵庫高等学校教職員組合の山崎です。もうご存じのように尼崎の尼崎南高校、神戸の神戸東高校、ここ市芦の武庫高校そして西宮の西宮西高校、この四つは今年も一年生は定時制高校へ入っています。うちの学校を例に言いますと二年生と三年生と四年生を合わせて今七三名だ

思います。

市立ですから交渉相手は市なんです、ごまかしは効きません。道路なんかよくごまかされて、これは市の管轄や県や言うてますが、市芦の問題は、これは市長、あるいは教育委員会の問題です。敵ははっきりしてゐるから、けんかしやすいなと思つて話聞かせてもらっていました。

来るまであまり怒っていません。怒りませんが、来て、話聞いているうちに少し怒らなあかんのかなと思つてきてます。忙しくてあまり力貸せないかもしれないですけど、自分も頑張りたいと思いますので、特に市芦市民の人、頑張ります。う。そうでないと腐った市芦になりま。これは、えらいことやと思つてます。以上です。

けおります。それでも今年、生徒会は体育祭も文化祭も頑張つてしようということをやってきました。来年も、三年生と四年生の二年生で、もう五〇人になりますけども、「ちっちゃくても体育祭・文化祭やるんじや」いうて、この前も夏休みに生徒会は合宿しております。

そういうことはうちの学校の現状なんですけども、この場で、今から市芦を廃校にさせるな、廃校にさせないようにしようと言つてるところで、これまでけんかしてきたけれどももう廃校を決められてしまった学校のことを、廃校を決められたところの教師が出てきて話してみてもさあどうなるのかなと思いが、指名されて前に来ておるんです。

先ほど言いました四校の廃校にしましてちよつと取り組みが遅かったけども、それぞれ定時制の生徒・卒業生が「存続を求める会」を結成して闘つてきて負けたと、その話はいろんなところでしてきました。そしてその後、尼崎の定時制の卒業生そして在校生はどうしてんやというのをちよつと報告しておきたいと思ひます。

といひますが、今ずっと聞いてたらやっぱ、市芦というのは前から知つてはいました。今も話聞きますと「生き方を教えてくれた」とか「優しさを教えてくれた」とか、「優しさの中にある本

生懸命取り組んでくれた先生を配転させたのか、選択教科が増えたためクラス内のつながりがなくなり、学校をやめていく子をみながら支え合っていくこともできなくなりました。など一時間内にわたって前田校長らに訴えた。

こういう当初生徒たちが周りの仲間たちに訴えて署名を集めて、校長につきつけていく。こうした闘いを非常にしんどい中で組んでいく、立ち上がっていく。こういうほんとうに切実な生徒の声の握り潰されていったというその先に、生徒の声を聞くことのできない学校へと追い詰められていくという、そういう経過をたどったわけです。

一昨年の神戸地裁の判決というのは、とばした、強制配転をした教師達を学校に戻せということだけを論じたのではなくて、そうした市芦の生徒の声を聞くことのできない学校へと変質させていった市教委、彼らが進めた教育改革を断罪するものであったというふうに言わなければならぬと思います。

だとすれば、私たちはほんとに恨み辛みというものをいっぱい抱えているわけであり。まだ彼らはいないおつて謝罪ももちろんしていない。深沢先生をはじめまだ四名の残った先生たちが市芦へ復帰したわけでもない。

そのうえで、市芦という学校を丸ごと

廃校にするという策謀に出てきた。だとすれば私たちは、今日の集会の中で多くの皆さんが語られたように、市芦が大事にしてきたこと全面に出して闘っていくべき。例えば定員内の不合格をなんとか踏みとどまらなければならない。あるいは被差別部落・障害児生徒の進学保障制度とか、あるいは在日外国人生徒のいわゆる民族的な自覚を呼び覚ましていくような教育だとか、こういう市芦の模索してきた、追及してきた遺産というものの。さらにさかのぼって言えば、さきほど井原のおばあさんの市芦が設立されるとき、いわば高校全入の思想、つまり人権教育というなら教育を受ける権利、学習権そのものを保障することが人権なのだ。人権を保障していくという責務を行政はまず第一義的に負っているという考え方が当初から市芦の設立には込められていたということ。

灘本さんが「自分が学んだ市芦を他の学校と一緒にしてほしくない」というふうに語られました。私はこの言葉は大変重たいと思いました。この言葉は市芦は他の学校とは違うんだと、私はその言葉を肝に銘じたい。市芦が追及しようとして成し遂げることができなかった、多様な生徒たちのそれぞれの声を寄り合わせる、そうした声が生かされていくような学校をつくっていく、そういう運動とし

て、この私たちの市芦存続運動があるのではない。これはまさにもう少し大きくいえば、虐げられた生徒たちがエンパワーしていく、励ましを受けていくという、本当の学びを高校の中に取り戻していくという運動として、これからの市芦廃校阻止運動が続けられていくことを願って止みません。そういうことを願ってこれからの運動に参加していきたいと思っています。

今日はここに来て本当によかったと思います。

一つは、今日卒業生の方の何人かお話が聞けたことです。あの教育委員の人に直接面と向かって聞いてもらいたかった。そして、多くの芦屋の市民にも聞いてもらいたかった。芦屋の市民というのは、こういう具合にして支援する人たちもたくさんいますけれども、もっともっとたくさんの方は憤りのない市民です。そして無関心な市民です。そして偏見の多い市民です。特に市芦のことで署名を頼むと、市芦なんかなくなってもいいというようなことを言外に言うような、そ

市芦をつぶすことは文化の破壊

佐治 孝典(市民)

本当の学びを高校の中に取り戻す

玉田 勝郎(市芦救援会副会長)

いつものこうした集会には市芦救援会の会長として玉本先生が、玉本節といひましようか、そのときどきの先生の怒り憤りといったものが思わず吐露されるというところから集会が始まっていくという経緯をたどってきたように思いますが、今日ただいま玉本先生はいまは亡き人となられました。ですから、私は市芦救援会の副会長という立場で一言今日お集まりの皆さんに訴えをしたいと思うわけがあります。

一九八六年一〇月、いまからちょうど一五年前のことです。ありますけれども、深沢先生はじめ二名の先生が一ヶ月の停職処分を命ぜられる。その後鈴木先生が市教委へとばされる。続けて六名、さらに二名の合計九名の教師が、市芦という高校を追放されるということからこの市芦の弾圧が始まりました。これはもともと大きな観点からいうと北村市長、松本教育長が打ち出した「教育改革」というふうな大きな網の目、攻撃としてとらえられるわけであり。それは市芦高校の教師に加えられた大変不当な、あるいは権力の横暴というふうなものでした。こ

ういう攻撃に対して直ちに救援会がつくられ、今日までその支援をしてきたというところがございました。

そのなかで一昨年の一九九九年九月、神戸地裁は、この九名の教師に加えられた市教委の処分というものが、まことに合理的な理由を持たない不当労働行為であったという、非常に明確な、つまり権力の犯罪ともいえるべき横暴に対して断罪が下された。救援会の立場からすると全面勝訴の判決を得たということで、私たちはいくらかの、この間の一五年の闘いの結果がそういうかたちで報われたと、そう考えてきました。

学校をとばされた教師達は、みんなとばされた先で、いろんなことをたくましく学び取りながら、あるいは障害者や障害児をもつ親の会とつき合ったり、あるいは定時制高校の存続運動とつながったり、あるいはいろんな処分を受けている労働組合運動と結びついたりしながら、闘い続けてきました。

その教師達を支援するということはもちろんだったわけですが、この市芦処分、弾圧の中で私、玉田が一番気になっていたのは、市芦という学校がどうなっていくかということだったわけであり。まず。先ほど司会者から一言で言えということを書かれておりまして焦っているのですが、この一五年の間、まず定員内の

不合格を出さないということで頑張ってきた市芦ですが、これが一切認められなくなる。あるいは管理職によって学校のカリキュラム、教育内容が一方的に押しつけられてくる。あるいは時間講師によって非常にいい加減な授業が穴埋めに行われる。あるいは先ほど永岡さんの話にもありましたけれども、教師もしんどくなっている生徒を切っていく。生徒の声を聞けない、聞き取ろうとしない。そういうところから立たされていく。そんなふうにして市芦という学校が「教育改革」の中でどんどん追いつめられていく。その追いつめられた先で生徒が切られていくということをとばしてきたわけ。これはまさに権力犯罪ともいえるべき学校潰しであったというふうに、今でははっきりと言えようかと思えます。

しかし、私はそのことを言いたいのではなくて、例えば処分が始まって二年たった一九八八年、ここに資料として朝日新聞の記事をもってきていますけれども、この八八年に卒業式終了後、二年生五〇名が前田校長に交渉を申し入れて一・二年生のほぼ全員二二〇名の署名を突きつけた。

記事はこういうふう書いてあります。「生徒たちは要求書を出した後、時間講師の授業はわかりにくい、時間講師を増やすくらいなら何故僕らのために一

ういうふうな態度を示す市民がたくさんいます。そういうような人たちがこの芦屋にいてということも考えなくてはいいけないと思います。

もう一つは、私はここに来て市芦の問題を見たら芦屋市の教育行政の劣悪さというものが実に象徴的に出ていって知ったことです。このことをしっかりと芦屋の市民の人たちに知ってもらいたいと思います。

震災以後、芦屋というのはほんとに腹の立つことがいっぱいある。特に芦屋の行政に対して腹の立つことがいっぱいあるわけなんですけれども、今のうちに学校を潰すという、先ほど誰かが、こういう学校を潰すということはとんでもないことだと言われましたけれども、まさに文化破壊です。この様なことは、芦屋は国際文化都市だとか女性の市長が言っておるそうだけれども、文化を破壊しながら何が文化都市だと私は思うんです。芦屋の場合は市芦が潰れたら連鎖反応が必ず起こると思います。そういうふうなことも含めて、私はこの際は非皆さんと一緒に闘っていきたいと思います。

先ほどおっしゃったように、市芦の場合には県や国ではなくて、まさに北村市長、芦屋市行政が相手で、そういう意味では敵の顔がよく見えていますから、ある意味では闘いやすい。皆さんと一緒に

頑張らしましょう。

